

## 5. 歴史基礎文化学系

歴史基礎文化学系は、日本史学・東洋史学・西南アジア史学・西洋史学・考古学の5つの専修によって構成されている。各専修は、いずれも固有の研究分野と研究方法をもち、それぞれが確固とした学問的伝統を有しているが、他の4専修とは研究方法を大きく異にする考古学も含めて、全体を歴史学として一括することができる。歴史学は、人類社会の発展の諸相を時間軸によって跡づけ、考察する学問である。歴史基礎文化学系は、5つの個別分野の特性や固有の課題を尊重しながら、歴史学としての共通の課題に立脚して構成された系である。

本系においては、上に述べたような系の共通性を土台としてふまえつつ、各専修の独自の要請を加味して、カリキュラムを編成している。各専修ではそれぞれ、入門的な性格をもつ講義、より専門的な内容にふみこんだ特殊講義、演習、実習、講読などの必修科目を設定しているが、これらの科目の配当年次は専修によって異なっている。日本史学は講義・講読・基礎演習を、東洋史学と西洋史学は講義・講読を、西南アジア史学は講義・語学をそれぞれ2回生に担当しているが、考古学は講義を1回生に、講読・実習を2回生に担当している。本系への分属を希望する学生諸君は、これらの点をふまえて、3年次にいずれの専修に進むのかを十分に考えておくことが望ましい。

各専修とも、それぞれの必修科目以外に、広く歴史基礎文化学系内からの講義・特殊講義などの授業の履修を求めている。これは、上に述べたような歴史学としての共通性を考慮して、専修の枠にとらわれずに、関係する諸学問分野の知識を学び、学問の視野を広げることができるように配慮したものである。とくに2回生の諸君は、この点をよく考えて、各専修の講義を共通して履修することが望ましい。

また、いずれの専修を選ぶにしても、まず必要なのは語学などの基礎的な学力である。1・2回生のあいだに、語学をはじめとする基礎的な科目の勉強を進めて、単位を修得しておくことが必要である。各専修の専門的な教育は、こうした基礎があることを前提として行われる。

各専修は、それぞれが1つの研究室を構成している。3回生以降は、この研究室が、専門的な知識を学び、卒業論文の作成に向けて勉強する場となる。各研究室には、担当の教員のほかに、多くの大学院生が所属して研究を進めている。志望を決めるさいには、上級生や大学院生の助言を求めるのも1つの方法であろう。

## ■ 日本史学専修

教授	吉川 真司	日本古代史
教授	上島 享	日本中世史
教授	谷川 穰	日本近代史
准教授	三宅 正浩	日本近世史
助教	木土 博成	古文書室（日本近世史）

- 〔著書・論文〕 吉川『律令官僚制の研究』塙書房，1998。同『シリーズ日本古代史 3 飛鳥の都』岩波書店，2011。  
同『天皇の歴史 02 聖武天皇と仏都平城京』講談社学術文庫，2018。  
上島『日本中世社会の形成と王権』名古屋大学出版会，2010。同『日本の歴史 08 古代天皇制を考える』（共著）講談社学術文庫，2009。同『史料纂集 福智院家文書』第一～三（共編）続群書類従完成会・八木書店，2005～2012。  
谷川『明治前期の教育・教化・仏教』思文閣出版，2008。同『岩倉具視関係史料 上・下巻』（共編）思文閣出版，2013。同『講座明治維新 11 明治維新と宗教・文化』（共編）有志舎，2016，同『「甲子園」の眺め方—歴史としての高校野球』（共編）小さ子社，2018。  
三宅『近世大名の政治秩序』校倉書房，2014。同「江戸幕府の政治構造」『岩波講座日本歴史』第11巻・近世2，岩波書店，2014。  
木土「琉球使節の成立」『史林』99-4，2016。同「海禁政策は琉球を対象とするか」『歴史学研究』967，2018。

吉川教授は、日本古代の政治・社会・文化に関する研究を行っており、近年は寺院史・地域史・文化交流史を中心に検討を続けている。上島教授は、政治・社会経済・宗教文化の側面より、日本中世社会の形成を考察しており、近年は鎌倉・南北朝期へと研究対象を広げている。谷川教授は、近代日本における教育と宗教の関係史を起点として、文化・政治・思想など、明治期を中心に近代社会の形成・展開過程を多角的に検討している。三宅准教授は、日本近世の政治史について研究しており、近世大名の政治構造や幕藩関係を軸に考察を進め、近世国家の成立過程とその特質を研究している。木土助教は、薩摩藩政史についての基礎的考察を進めるとともに、琉球使節や朝鮮信使といった使節研究を深めようとしている。

### 〔研究・教育の内容〕

専門分野についての特殊研究が講義されるほか、スタッフのカバーできない分野については人間・環境学研究所、人文科学研究所、総合博物館など学内各部局、あるいは学外からの講師による講義が行われる。学部学生には、歴史学の基礎となる文字史料の正確な読解力を身につけることが要請されるので、演習のかなりの部分はそれにあてられる。古文書は、古代・中世・近世・近代それぞれに固有の性格と研究上の問題点をもっているため、演習以外にも実地調査や特別研修などに自発的に参加し、体得することが望ましい。とくに、京大日本史の特色は実物史料による教育にあり、総合博物館・古文書室に蒐集された古文書・古記録や影写本と早くから日常的に親しむのがよい。4 回生になると、卒業論文のための演習が必修で、自分でテーマをえらび、発表しながら、論文をまとめていく。みずから問題を発見する力を養うことが肝要である。

### 〔どんな人を望んでいるか〕

歴史学は地球上に継起した人類社会の展開の諸相を時間軸にそって位置づけ、そこに示された事実が現在のわれわれにとってもつ意味を認識しようとする学問である。日本史学は歴史学の一分野として、日本列島における住民の歴史を研究し、その固有の特質を人類史の普遍的性質とともに把握しようとする。したがって、広く国際的な視野から日本史をとらえる姿勢が必要で、歴史学はもとより、国文学・考古学・地理学・人類学・社会諸科学など、隣接科学とその成果に関心の深いことが望ましい。歴史に対する問いは現代の生活の中から発せられるのであるから、現実の人間生活のあらゆる側面に興味をもち、それをとりまく社会や政治・文化の動向にもたしかな眼をもちたい。世に「歴史好き」は多いが、その多くは研究成果の消費者にとどまっている。研究を進め、創造する苦しみをいとわぬ人をもとめている。歴史の史料は多様であるが、中心は文字史料である。木簡から文書・記録・編纂物まで、質を異にする諸種の史料を読みこなす力が最低限要請される。

## ■ 東洋史学専修

教授 吉本道雅 中国古代史  
教授 中砂明德 中国中世・近世史  
教授 高嶋航 中国近代史

〔著書・論文〕 吉本『中国先秦史の研究』（京都大学学術出版会，2005）  
中砂『中国近世の福建人 士大夫と出版人』（名古屋大学出版会，2012）  
高嶋『中国ジェンダー史研究入門』（共編）（京都大学学術出版会，2018）

東洋史学大講座は東洋史学専修と西南アジア史学専修の二専修から構成される。そのうち東洋史学専修の対象とする分野は、中国史および東アジア諸民族史（モンゴル、マンチュリア、朝鮮、東トルキスタン、チベット、東南アジアなどの諸民族・諸国家）である。現在の教員は上記の3人であるが、ほかに人間・環境学研究科、人文科学研究所などの教員の協力を得、豊富な授業が行なわれている。

歴史学は史料にもとづく学問であるから、正確な史料読解力が先ず要求される。中国史を中心とする東洋史では、とくに漢文史籍の演習、講読に力を入れており、3回生になるとその予習に追われることになる。朝鮮史や内陸アジア史さらには東南アジア史を志望する者も、漢文の修得は必須であり、また現代中国語は中国の論文を読むためだけでなく、古典文を理解するためにも、東洋史の学生にとっては必須の語学であるから、機会を見つけて学習しておくのが望ましい。もちろん中国史以外の研究を専門にしようと志す者は、それぞれの諸言語（朝鮮語、モンゴル語、満洲語、チベット語、ベトナム語など）を学ばねばならない。それらの言語の一部は学部で開講されており、また開講されていない言語についても、学習の機会を得ることはできる。要は各人の学習への意欲にかかっているのである。

歴史学は現在人がどのように生き、かつてどのように生きてきたか、を問うことから始まること、東洋史もその一環であることは言うまでもない。修学上強く希望することは、はじめから研究対象をせまく限定せず、いろいろな分野に関心を持ち、幅広い知識を身につけることである。それによって豊かな人間性を養い、歴史に対する“眼”をそなえることになろう。

京都大学は、東洋史を学ぶのに最も恵まれた環境にある。文学研究科図書館を始め、文学研究科附属文化遺産学・人文知連携センター（羽田記念館）や人文科学研究所内に設置された東アジア人文情報学研究センターなどが、全国にもまれな東洋史関係文献の一大宝庫を形作っている。また、専門研究者があらゆる方面にわたって、厚い層を形成している。研究室内でも、研究生・研修員・大学院生の研究テーマは、東洋史学のほとんど全領域をおおい、テーマごとの自主的な研究会が学部生を交えて行われている。研究生・研修員・大学院生は学部生の日常の勉学におけるよき指導者でもある。

東洋史学研究室には、全国学会である東洋史研究会の事務局が置かれている。東洋史研究会は1933年に創設され、毎年1回大会を催し、学術誌『東洋史研究』（季刊）を発行している。同誌は国際的にも声価の高い専門雑誌で、若い研究者の登竜門でもある。

## ■ 西南アジア史学専修

教授 磯貝 健 一            イスラーム期中央アジア史、イスラーム法廷文書研究

〔著書・論文〕 磯貝・大江・堀川編『シャリーアとロシア帝国』臨川書店、2014年。Ken'ichi ISOGAI, "Waqf as a Device for Sustaining and Promoting Education: A Case from Pre-modern Central Asia," In: Miura Toru (ed.), *Comparative Study of the Waqf from the East: Dynamism of Norm and Practices in Religious and Familial Donations*, Tokyo, The Toyo Bunko, 2018. 磯貝健一「遺産の共有：19世紀後半から20世紀初頭中央アジアの家族と家産継承」『西南アジア研究』89, 2019年。

西南アジア史学研究室は、広く西アジアの歴史にも関心を寄せた著名な東洋史学者宮崎市定、わが国の古代イラン学研究の先駆者足利惇氏両教授らの尽力により、西アジア・中央アジアの歴史と文化に関する研究・教育を推進するため1969年に開設され、初代の教授にはわが国で最初にイスラーム時代中央アジア史の研究分野を開拓した羽田明が就任した。以降本専修では、イスラーム世界の歴史を軸に、古代オリエント史を含む領域に関する研究・教育を展開してきたが、現時点では主としてイスラーム時代の西アジアと中央アジアに関する授業が開設されている。

本格的な歴史研究が、研究書や翻訳などの二次的文献ではなく、あくまで原典史料に基づかねばならぬことは改めて言うまでもなく、本専修へ進む者には、まず原典史料を取り扱うための言語を習得することが不可欠である。現時点では、アラビア語、ペルシア語、トルコ語(オスマン語を含む)などの文献を用いた入門、初級の講義をはじめ、原典テキストを講読・研究する演習に至るまで様々な授業が開設されているので、専修生は自らの関心・興味に従って学習する言語を選択することが出来る。ただし、アラビア語はイスラーム世界のいわば核となる言語であるから、イラン史やトルコ史、中央アジア史、南アジア史の研究を志す者も、基礎的な知識を持つことが望ましい。

本専修では、個々の学生の知的関心は最大限尊重され、学生は自由に研究のテーマ(具体的には卒業論文の主題)を古代オリエント史やインド亜大陸の歴史をも含む広範な分野のうちから選ぶことができ、また専任の教員は学生が研究を進める上での可能な限りの助力を惜しまない。しかしながら、限られたスタッフと授業数の枠内では、例えばイベリア半島からインドネシア島嶼部におよぶイスラーム世界の全域をカバーすることはすでに不可能であるから、専修生には、授業で習得した原典史料の読解能力と歴史を構築するための論理的方法を自らが選択した対象に対して創造的に応用することが期待される。

そのように、主体的に研究を推進するためには、その分野の研究が過去においてどのように進展してきたかということ、すなわち研究史を把握することが出発点とならねばならない。それ自体現在では問題視される現象ではあるが、西アジア・中央アジアの歴史研究は、近年に至るまで現地の学者よりむしろ西欧諸国の専門家によって推進されてきたという事情が存在するため、あるひとつの問題の研究史を辿るに際しても、複数のヨーロッパ語(フランス語、ドイツ語、ロシア語など)の文献を読むことが要求されることになる。こうした諸言語は、専修に進んだ後必要に応じて学習することも出来るが、それ以前にも少なくとも第一・第二外国語は十分に習得しておく必要がある。

本専修に関連の深い施設として、北区大宮南田尻町に羽田記念館がある。この施設は、国際的にも著名な北アジア、中央アジア文化史の専門家であり、本学の総長を務めた羽田亨博士(1882-1955)を記念して建設されたものである。中央アジア・西アジアに関する文献が備えられ、定期・不定期の研究会や講演会がここで開催されている。

また本研究室には、関連学会である「西南アジア研究会」の事務局がおかれ、雑誌『西南アジア研究』を年2回刊行している。

本専修に関する更に詳しい情報については、磯貝(753-2741)に直接照会されたい。

## ■ 西洋史学専修

教授 小山 哲 西洋近世史

教授 金澤 周 作 西洋近代史

准教授 藤井 崇 西洋古代史

[著書・論文] 小山 哲『ワルシャワ連盟協約（一五七三年）』東洋書店，2013 ほか。

金澤周作『チャリティとイギリス近代』京都大学学術出版会，2008 ほか。

藤井 崇 *Imperial Cult and Imperial Representation in Roman Cyprus*, Franz Steiner, 2013 ほか

服部良久・南川高志・小山・金澤(編著)『人文学への接近法—西洋史を学ぶ』京都大学学術出版会，2010。

金澤 (監修)・藤井他 (編)『論点・西洋史学』ミネルヴァ書房，2020。

ギリシア・ローマに始まり、今日に至るヨーロッパ文明は、近世以降世界の諸文明に多大の影響を与えてきた。明治以降の日本の歴史もまた、絶大な影響を受けてきたことは言うまでもない。ヨーロッパや西洋文明世界の歴史を深く理解し、いかに解釈するかは、日本人にとって不可避の課題である。この課題を歴史学の立場から正しく果たすためには、一方では西洋人自身による豊富な研究成果を吸収する必要がある、他方では日本人の立場から、更にはグローバルな視野に立って、ヨーロッパや西洋文明世界の歴史の意味を明らかにすることが望まれる。

西洋史学専修は、3人の専任教員が一体となって研究と教育に当たっている。小山教授はポーランド近世の政治文化を専攻している。金澤教授は、イギリス近代の政治と社会を専門分野としている。藤井准教授は、ヘレニズム期とローマ帝政期の政治、社会、宗教を専門としている。学生・大学院生の専攻テーマは、こうした専任教員の専攻分野に縛られることなく、自由に選択されており、実に多様である。

次に西洋史関係の授業(講義・特殊講義・演習・実習・講読)について説明する。まず「講義」は「西洋史学序説」と題され、主に西洋における歴史学の発達や歴史意識の変遷、あるいは西洋史研究の実際の進め方などについて講じる。必須科目であり、2回生で履修することが望ましい。「特殊講義」は各教員がそれぞれ専攻領域についての研究の結果をかみくみで話すものである。専任3教員がこれを担当するほか、京都大学人文科学研究所のスタッフおよび他大学からの非常勤講師によって、毎年ヴァラエティに富む講義が行われている。これらの特殊講義を数多く受講することによって、学生は西洋史上の重要な研究テーマについての高度の知識を習得するとともに、現在の学界における論争点や具体的な研究の方法などについて学ぶことができる。

「演習」は欧語文献をテキストとして用い、その読解、学生による報告と討論を行う。3回生はまず各自の関心にしたがって「古代史」、「中近世史」、「近代史」のいずれかの時代別演習に出席する。この演習には大学院生も専攻に分かれて出席し、報告と討論に参加する。3回生はまた、「実習」に出席して西洋史学の研究方法を具体的に技術的なレベルから習得する。次いで、4回生は全員「卒論演習」に出席し、卒業論文の中間発表を行う。それゆえ、3回生の間に特殊講義や演習に出席しながら自分の関心の在りかを見定め、卒業論文のテーマをある程度しぼっておく必要がある。最後に、「講読」は「演習」とともに卒業論文の作成に必要な欧語文献の読解力を養うことを目的とするが、卒業要件としては、英・独・仏・露・伊の各国語のうちから少なくとも2つを(ただし、そのうち一つは英・独・仏・露書のいずれかを)履修しなければならない。また「講読」のうちの1科目を、学部共通科目のギリシア語、ラテン語、スペイン語(中級)のいずれかで履修することもできる。

さらに、1~2回生の間にぜひ勉強しておいて欲しいことを記しておく。まず外国語の習得。西洋史の授業では欧語文献の読解が大きな比重を占める。英語以外に少なくとも1か国語を習得すること。古代史を専攻しようとする者は古典語、中世史の場合もラテン語が専門研究者になるためには習得が必要であり、近世以降のヨーロッパ諸国の研究を希望する場合も、その国の言語を学ばねばならない。余力があれば、これらも2回生、3回生の間に始めておくことが望ましい。

なお、本専修専任教員が編集した書物『人文学への接近法 西洋史を学ぶ』(京都大学学術出版会)は、西洋史学を学ぶ意義や具体的な方法から留学や就職、参考文献まで説明しており、『論点・西洋史学』(ミネルヴァ書房)は西洋史学上の数多くの重要論点を簡便に網羅しているので、ぜひ参照されたい。また、本専修の活動については、下記の専修ホームページが紹介している。[https://www.bun.kyoto-u.ac.jp/european\\_history/eh-top\\_page/](https://www.bun.kyoto-u.ac.jp/european_history/eh-top_page/)

## ■ 考古学専修

教授 吉井秀夫 朝鮮考古学

准教授 下垣仁志 日本考古学

〔著書・論文〕 吉井『古代朝鮮 墳墓にみる国家形成』、京都大学学術出版会、2010。同「朝鮮古蹟調査事業と「日本」考古学」『考古学研究』60-3、2013。

下垣『古墳時代の国家形成』吉川弘文館、2018。同『世界の初期文明』（翻訳）、同成社、2019。

考古学は、過去の人間が作り、使用した「物」を材料に、過去の人間の行動を研究する学問である。材料となる「物」は、主に発掘調査によって獲得する。したがって、考古学の研究を志す者は、まず、「物」から過去の人間の「行動」を復原する手法や知識、発掘調査によって必要な情報を獲得する手法や知識などを身につける必要がある。

考古学の研究対象は、人間生活の痕跡さえあれば、時間的・空間的な限定はない。厳密な発掘調査によって、さまざまな情報をもつ「物」データを集める。その「物」のあり方から直接「物質文化」を認識し、背後にある「精神文化」を読みとり、それらの個々の研究成果の統合をめざす。しかし、出発点となる厳密な発掘調査、「物」の観察・分析を系統的に行うことすら容易ではない。「物」を形態・製作技術・機能などで分類し(型式分類、形態分類)、各々のカテゴリーの時間的・空間的組み合わせを、定性的かつ定量的に検討した結果から、過去像を推察するのが考古学のオーソドックスな手法である。

しかし、現代の考古学では、たとえば動植物遺存体の遺伝子観察など、科学的でミクロな分析も、過去像の復原に大きな成果をもたらしつつある。考古学を学ぶ者は、自らその分析を実施する必要はない。だが、少なくとも、生物学・化学・物理学・地質学・土壌学など、自然科学分野の分析技術やその最新成果に深い関心を払う必要がある。資料の分析を自然科学者に託すとき、一体、何を求めるのかは考古学者の責任である。また、製作者・使用者の直接の証言を得られない考古資料を解釈する上で、歴史学・地理学・民俗学・民族学・文化人類学・社会学など、他の人文・社会科学分野の知識も学ぶ必要がある。

日本以外の地域を研究対象とする場合には、当然、その地域の言語を修得する必要がある。しかし、日本考古学を専攻する場合でも、ヨーロッパの言語、少なくとも英語力を鍛えることが大切である。外国の研究者の来日も頻繁となり、国際学会に参加して共同研究を進める機会も増えてくるからである。そうした集会や交流の場で、日常の研究成果を語り、他国の研究者の方法や成果に学ぶことは有意義であるばかりでなく、今後、避けて通れなくなるだろう。

考古学専修を希望する学生は、以下の点にも留意されたい。

- ①考古学は「物」を資料とする科学だから、「物」に親しみを持たねばならない。「物」についての観察や知識を広め、未知の「物」に直面した時にも、その材質や作り方、使い方を豊かに想像できるように訓練する必要がある。
- ②発掘は研究の基礎資料を獲得する場であるだけでなく、仮説検証の場、新たな問題を掘り起こす場でもある。発掘は遺跡の破壊だと言われるように、繰り返しのきかない実験でもある。当然、実施には細心の気配りが必要で、鋭い注意力を養う必要がある。また、発掘は知的な共同作業なので、体力だけでなく、バランスのとれた協調性や統率力も必要である。
- ③研究者の「眼」を養うには、「体」で覚えるのが早道である。まとまった休暇期間には、できる限り発掘に参加するのがよい。必ずしも条件のよくない合宿生活に耐える精神力を身につけるためにも、日頃から生活のリズムを整える努力をされたい。
- ④「物」を観察し、必要なデータをとる基礎訓練は考古学実習で身につける。三回生で自分の研究対象を見つけ、四回生で卒業論文を提出するためには、考古学実習を二回生のうちに履修するのが望ましい。